信濃教育

巻頭言

長野県の強みとは

長野師範附属小学校で新教育実験の「研究学級」が開設され、「信州白樺派」の若い教員が自由教育を求めていたころ、教員を交換して、現場から教育の交流を図ろうとする「交換教授」が行われた。その一つが長野県と鹿児島県の教員の交換であった。

「長野県と鹿児島県は、教育の方針も方法も両極をなす対照的な県であった。長野県は維新以後積極的に近代的な教育を追求し、鹿児島県は三百年の歴史をもつ尚武の伝統を護持する保守的な教育を誇った」（『信州教育とはなにか』中村一雄著）この交換教授には、貪欲に教育の進歩を目指す当時の教育関係者の意気込みを感じる。大正二年から二年間鹿児島県に派遣された三名の教員は「鹿児島教育観」を雑誌『信濃教育』（大正五年六月～六年四月）に九回にわたり掲載し、鹿児島県の教育を詳細に報告している。

「当時吾々は信州教育の何たるかを解しなかった。けれど一度県をはなれて客観視すると一挙両得鹿児島も解せられれば今まで眼に見えなかった信州の姿も誠によく見える」（『信濃教育』大正五年六月）と彼らは言う。そして彼らの見た信州教育の姿とは何であったのか。

鹿児島県人は、「先輩長上の言を崇拝し、よくその命を奉じ、気持よく納得して事に当る」が、それは他律的であり受動的だと彼らは言う。長野県人は「他と云うよりも我自身と云う独立独行の念強く、人が云った所で直ちに頷かない」自立的で主我的だという。さらに長野県人は、もっと他人の長所を賛美すべきであり、他を卑下したり潰したりするのは慎むべきであるという。どこにでも、誰にでも強みと弱みはあるものだ。そして「長野県の各自我自らの力を確信して猛進しつつあるのは実に愉快でたまらない」と鹿児島県の二年間の生活を経て、彼らは総括する。

経営学者P・F・ドラッカーは「何ごとかをなし遂げるのは、強みによってである。弱みによって何かを行うことはできない。できないことによって何かを行うことは、とうていできない」と言う。長野県の教育の強みは何なのであろうか。長野県の教職員の強みは何なのであろうか。その議論を抜きにして本県のこれからの教育を語ることに意味があるのだろうか。

（信濃教育会会長　武田　育夫）